書評：川橋範子・黒木雅子　著
『混在するめぐみ：ポストコロニアル時代の宗教とフェミニズム』
（東京：人文書院、2004 年）
評者：加藤恵津子

いずれの宗教かにかかわらず、一般に「信心深い女性」は「男性に対して従順な女性」だと想像されがちである。このような想像は、ある面、現実から派生している。実際多くの場合、女性は、「神・仏・超自然の存在に対して従順」であることと、「神職や神学を占有する男性たちに対して従順」であることを、抱き合わせで要求される。だが、女性たちが「みんな」「何の疑問も持たず」「嬉々として」このような要求を受け入れていると思ったら、それは想像者の頭の中のステレオタイプの問題である。

本書は、一般人や（男性）聖職者たちの抱くこのようなステレオタイプ的・一枚岩的な「女性信徒」像を覆そうとする試みである。執筆者の一人・川橋は、宗教学者・文化人類学者として、また曹洞宗の僧侶の「つれあい」として、仏教寺院内に生きる女性たち―僧侶の妻や尼僧―の声を丹念に拾い上げ、仏教界を支配する家父長制の限界を描き出す。もう一人の執筆者・黒木は、社会学とフェミニスト神学の立場から、サンフランシスコに住む日系アメリカ人キリスト教女性たちの声を集める。そして彼女たちが、男性が定義した神や正義にも、白人女性が唱えるフェミニズムにも疎外感を感じる中で、自分なりの（部分的）キリスト教信仰をつむぎ出す様を描く。本書はこのように、専攻も調査対象も、対象となる人々との関係も違う二人の研究者が、理論的枠組を提示する冒頭二章は共同執筆し、続く中核の二章は各自が専門のフィールドについて執筆するという形式で書かれている。

個々のフィールドの興味深さもさることながら、本書の理論的枠組において特筆すべきは、この本が「宗教」「フェミニズム」「ポストコロニアリズム」という「トリロジー」（三つ巴）の上に成り立っているという点である。まず、「宗教」と「フェミニズム」はこれまで「不幸な関係」にあったと執筆者は言う。フェミニズムは宗教を、家父長制が女性支配のために用いる「主人の道具」であると見なしてきたし、また宗教学も、他の学問分野にも増してフェミニズムの思想に抵抗を示してきたからである。だが、宗教学において声を聞かれることの少なかった女性信徒に光を当てるには、この親和性の薄い二つの分野を融合させる必要がある。

ではなぜここに「ポストコロニアリズム」も加わる必要があるのか。この部分の議論に、本書の真骨頂がある。これまでのフェミニズムにおける宗教批判は、「白人」フェミニストが、宗教（よく槍玉にあがるのはイスラーム教）と結託した「第三世界」の男性の女性への抑圧を批判する、といった白人中心主義的・植民地主義的態度と不可分だったからである。このようなフェミニズムの磁場においては、「有色」の女性は、「（宗教による、また男性による）被抑圧者」

として描かれがちである。「白人」フェミニストによる「有色」の女性たちのこのような表象に対しては、「第三世界」ないしイスラーム文化圏に（部分的にでも）身を置く女性知識人たち自身から、すでに疑問や批判が投げかけられている。女性学のチャンドラ・モハンティ、文化人類学のリラ・アブ＝ルゴッドなどはその好例である。

そうであれば本書の執筆者たちが、日本人・日系人女性信徒らを描くにあたっても、フェミニズムをもって家父長的な宗教制度に挑戦するだけでは、白人フェミニストが既に抱いている「同民族の男性に抑圧されたかわいそうな日本人・日系人女性」というステレオタイプを強化してしまう危険がある。この点で、白人中心主義的フェミニズムもまた「主人の道具」である。これを避けるには、フェミニズム内部のパワー関係の批判も同時に行わねばならないのである。

有色女性の表象に関するポストコロニアルな問題は、宗教というトピックを超えて重要である。この第三の足場を取り入れることを発想できたのは、両執筆者ともアメリカのアカデミアで過ごし、現地の研究者との間で違和感や葛藤を経験し得たからだろうと想像する。だが、そういった具体的な体験が本書にはほとんど書かれていないのは残念である。アメリカにおけるそれまでの日本人・日系人女性の表象や研究、研究者の態度に関して、両者ともしかるべきスペースを割いてより具体的に、より丁寧に論じるべきと感じる。そうでなければ、日本の読者がこのポストコロニアルな問題を「自分のこと」として感じることは難しいし、下手をすると日本の読者が自らの立場の独特さに無頓着に、イスラーム圏やいわゆる「第三世界」の女性との安直な連帯感を感じてしまいかねない。

さて、メインの章の一つで、まず川橋は、今日多くの仏教宗派において僧侶の妻（「寺族」）たちが、「黙認されているが公認されない」あいまいな存在として、負い目を持って生きなければいけない現状をあぶり出す。彼女たちがその存在を公には認められない背景には「虚偽の出家主義」、すなわち表向きには僧侶は独身であらねばならないという考えがある。さらにこの考えの根本には、男性が歩む仏の道を妨げる存在としての女性への非難がある。そして当の妻たちは、うしろめたさの中にも僧侶を「裏方」として支え、寺の後継者たる男子を出産・養育するという役割はしっかりと担わされる。寺院を非日常の聖域としてロマン化しがちな外部読者にとって、これらは目を疑いたくなるような報告である。だが今日、寺族・尼僧・その他の女性たちはネットワークを作り（川橋はその運動の一端を担う）、家父長制から自由な仏教を創り出す活動を行っている。彼女たちは仏教の中にとどまり、仏教の刷新に主体的に関わっているのである。コロニアリスト的態度の研究者には気づきにくい、「現状に満足している」ので「かわいそうな被害者」でもない女性たちの姿がそこにある。同時に川橋は、異なる宗派に属する寺族や、尼僧など、異なる立場にある女性たちの声を自己反省とともに拾いあげ、寺院に生きる女性が一枚岩でないことも示す。もう一つの重要なポイントである。

続く章で黒木は、アメリカ国内では「マイノリティ女性」である日系人（キリスト教）女性たちの自己規定の語りに焦点を当てる。社会学者らしく黒木は、彼女たちの多様な語りを、ジェンダー（女性であること）、エスニシティ（日系アメリカ人であること）、宗教（クリスチャンであること）という三つのファクターの多様な組み合せとして分析する。実際、彼女たちの語りは必ずしも宗教ないしキリスト教というトピックに限定されない。ここで注目されるのは、ある者は男性中心主義的な牧師の語りに耳を貸さず、またある者は、キリスト教と他の東アジア的宗教（仏教や儒教）を組み合せた信仰を持つと言い、またある者は、白人フェミニストから受けた夫婦関係に関するアドバイスを「文化的感受性」ゆえに部分的にしか受け入れず、またある者は、永年フェミニズムよりも人種問題を重要視してきたと語る。これらの語りから共通して見えてくるのは、彼女たちが自らを「（白人および日系人）男性とも違うが、白人女性とも違う」と考えているさまである。フェミニスト神学は「女性の経験」の重要性を主張するが、エスニシティによって「女性の経験」も異なる以上、すなわち「女性」が一枚岩でない以上、ここにポストコロニアル研究的視点が不可欠であることを、日系キリスト教徒女性たちの語りは示している。

これら中核の二章は、フィールドワークに基づくだけあって迫力がある。だがあえて批判を呈するならば、せっかく宗教をメイントピックとし、現場の女性信徒たちの声を集めているにもかかわらず、女性たちが、具体的にそれぞれの宗教の教義のどの部分を心の支えにしているのか、どの部分に男女平等の希望を見出し、その宗教から立ち去らないことを選んでいるのかが見えにくい。特に黒木の章では、「キリスト教」は「仏教」「儒教」「ジェンダー」「エスニシティ」などと並ぶキーワードの一つとなっており、インタビュイー一人一人が教義の具体的などの部分に共鳴したり、どのように自分なりに解釈したりしているのかの記述がない。川橋の場合は、釈尊の教えの自分なりの解釈を提示している（曰く、釈尊は性別・人種といった「生まれ」に基づく差別を戒めた、また「すべてが関係性の中にあり、たえず変化するという真理」は、「男女の性差を不可変で普遍的なものと決め付ける」言説を戒めるはずである）。願わくは、ネットワークに属する他の女性たちの解釈も聞いてみたいものである。

さらに本書全体の批判を述べるならば、二人の研究者が明快な一つの方向に読者を導いているとは言い難い。抽象的なレベルでは多くの理論を分かち合っているように見える二人も、各自の章を読むと、理論の具体的な使い方や最終的な主張においては部分的にしか共通点がないことがわかる。例えば川橋の章に登場するのは、寺院内で生活する、宗教と生活が不可分な関係にある女性たちであり、彼女たちにとって仏教の刷新は、文字どおり人生をかけた問題で

ある。一方、黒木の章に登場する女性たちにとってキリスト教は、先述の仏教女性たちと同じ意味で人生を左右するものではなく、自分というパレットにおける絵の具の一つ、すなわち他の宗教と混合させたり、遠ざかったりすることのできる、いわば自分のアイデンティティ形成のために自由に交渉できるファクターの一つであり、教会制度の中核に切り込んで行く必要性までは彼女たちに感じさせないもののようである。いずれの女性たちも「彼女たちを周辺化してきた宗教伝統のなかに」「踏みとどまる道を選んだ」（155 頁）といっても、宗教との日々の具体的な関わり方はかなり異なる。こういった諸所の細かな点で、読者は混乱を免れない。

もっとも執筆者たち自身、これらの不整合は承知のようで、二人の立場の違いを「ずれ」「ポリフォニー」といった言葉で説明し、これら自体を本書の「めぐみ」としている。読者の一人としてはそれほど肯定的な捉え方はできないのだが、それでも本書を、未踏の分野への挑戦であり、たとえ抽象的なレベルでではあっても、まずは大掛かりな理論的枠組を提供し、さらにたとえ不整合はあっても、フィールドワークによる複数の具体的分析例を提示しようとした最初の試みであると捉えれば、勇気ある一歩として評価できる。この本は、「宗教」と、「フェミニズム」または「ポストコロニアリズム」のうちどちらかを結び付けて論じようとする今後の日本での議論に、「三つ目」の視点が必要であることを警告して止まないだろう。

BOOK REVIEW:Kawahashi, Noriko and Masako Kuroki
Mixed Blessings: Feminism and Religion in the Postcolonial Age.
Tokyo: Jinbun-shoin, 2004.
REVIEWER: Etsuko Kato

It is generally believed that ‘religious women’ are ‘submissive women to men’ . This belief does in part derive from reality. In actual practice, women are often expected to be submissive to God, Buddha, or other deities as well as to the men who rule religious institutions. However, the assumption that this is ‘willingly’ and ‘without question’ accepted by all women is a stereotype.

This book is an attempt to counter the stereotypical, monolithic image of ‘religious women’ held by the general public and clergymen. One of the authors, Kawahashi, is a theologist and anthropologist as well as the wife of a Soto school Buddhist priest. She collects the stories of female priests and priests’ wives to depict the limitations of patriarchal Buddhism. The other author, Kuroki, writes from the perspective of sociology and feminist theology. She gives voice to Japanese-American Christian women in San Francisco who, feeling alienated from both male-centered theology and White woman-centered feminism, create their own (partly) Christian beliefs. Thus, the book is a result of a collaboration between two researchers of different academic backgrounds and research positions and who relate differently to their research subjects. They write the first two theoretical chapters together and the following two fieldwork-based chapters individually.

An interesting aspect of this book’s theoretical fieldwork is that it is based on a ‘trilogy’ of religion, feminism and post-colonialism. The authors first point out how religion and feminism have so far had a ‘dismal’ relationship. Feminists have criticized religions as ‘the master’ s tool’ , used by the patriarchy to oppress women. Theology, in turn, has showed more resistance to the concepts of feminism than any other academic discipline. Thus, for this book to highlight the stories of women in religion, a reconciliation between these two academic fields is critical.

But why must post-colonialism also become involved here? The feminist approach to religion has so far been inseparable from white-centric, colonialistic attitudes. Feminists have criticized the oppression by men of women in the so-called Third world, often Islamic societies. Such depictions have already been questioned and critiqued by

intellectual women from these societies such as the feminist Chandra Mohanty and the cultural anthropologist Lila Abu-Longhod.

Against this background, if the authors were to depict Japanese women' s challenge towards the religious patriarchy from a feminist standpoint, they are likely to only intensify the White women's stereotypes of the 'pitiable Japanese women' oppressed by the men in their culture. In this respect, white-centric feminism is also 'the master's tool'. In order to avoid this, the authors must therefore simultaneously critique the power relations within feminism.

Post-colonial problems relating to the depiction of non-white women go beyond the issue of religion. In my opinion, the authors' excellent idea of introducing post-colonialism to the book must be a result of their own academic experience in the United States and the gulf they felt between themselves and their North American colleagues. However, it is unfortunate that they did not write about their own direct experiences of depictions and attitudes towards Japanese/ Japanese American women in the book. Without that, Japanese readers would find it difficult to personally relate to the postcolonial problems in their book and may fall into the trap of seeing it from a safe distance as a problem for women of Islamic societies or the 'Third World' .

In her chapter, Kawahashi elucidates the ambiguous status and guilt-ridden life of the wives of priests in many Buddhist sects today. The women' s existence is not officially admitted because of the 'false celibacy' of the priesthood, behind which is the condemnation of women as a seductive, hindering existence for men following the Buddha' s way. Still the wives are fully expected to support their priest husbands 'from behind' , and to bear and raise the male children who will eventually become successors of these temples. (This may come as a shock for those readers who tend to romanticize the temple as a world away from the mundane.) However, the women depicted here are neither 'content' with the status quo or 'miserably oppressed' , as colonialistic researchers may assume; they have established their own network (of which Kawahashi herself is a part) and are actively working to create a patriarchy-free Buddhism. At the same time, Kawahashi shows an awareness of the polyphony of the voices of women from different sects.

In the next chapter, Kuroki focuses on Japanese-American Christian women who tend to be viewed, for their ethnicity, as 'submissive' , 'minority' women in their country.

As a sociologist, Kuroki analyzes the women' s discourses on identity according to three factors - gender, ethnicity and religion. It was interesting that the women identify themselves away from both White or Japanese-American men and White women. For example, one woman talks about how she refuses to listen to a minister' s male-centric sermons, one claims that her faith is a fusion of Christianity and East Asian religion, another woman says she accepts only part of the white-feminist discourse, while yet another stresses that she has long considered problems of human rights, rather than feminism, as a priority. Their stories highlight the need to critique mainstream, male-centered theology from a post-colonial perspective, as opposed to traditional feminist criticisms which emphasize the significance of 'women' s experience' but overlooks actual differences among women.

These two chapters have a powerful impact as they are based on actual fieldwork. Still, one drawback is that the authors do not clarify the aspects of their religions in which these women find salvation or see hope for gender equality, and which make them continue with their faith. Especially in Kuroki' s chapter, 'Christianity' is just one of the key terms alongside 'Confucianism' , 'gender' , and 'ethnicity' ; the author does not discuss what parts of the Bible the women sympathize with, or in what unique ways they may interpret it. Although Kawahashi presents her own interpretation of Buddha' s teaching that would support gender equality, I would have liked to read about the other women' s interpretations as well.

Another shortcoming is that the book as a whole does not lead readers in one clear direction. The two authors appear to share a common ground on the abstract level of theory but are quite different when it comes to applying the theories in actual practice as well as in their conclusions. For instance, for the women residents of temples depicted by Kawahashi, life is inseparable from their religion so reform in the religion is a vital issue. Meanwhile, for the women in Kuroki' s research, religion is just one of the factors that they can negotiate freely for the sake of forming their identity. Thus, the ways the two groups of women interact with their religions are quite different, even if the authors conclude that 'they chose to remain in their religions' which have 'long marginalized them' (p.115). This, and other discords in detail, cannot help but confuse readers.

Not surprisingly, the authors themselves are aware of this discrepancy and explain it as 'gaps' or 'polyphony' that are 'blessings' for the book. As a reader, I cannot accept the argument in such a positive way. However, this book can also be viewed as a courageous first step into an innovative new field. They first construct a theoretical framework (even if only on an abstract level) and then present actual cases (albeit inconsistent) based on fieldwork. This book therefore highlights the need to incorporate the 'third' perspective of 'postcolonialism' in the previously dichotomous debate between 'religion' and 'feminism' .